



TITLE:

一次元系における相転移と秩序(「統計力学における基礎的諸問題」,基研研究会報告)

AUTHOR(S):

高橋, 実

CITATION:

高橋, 実. 一次元系における相転移と秩序(「統計力学における基礎的諸問題」,基研研究会報告). 物性研究 1971, 16(3): B3-B6

ISSUE DATE:

1971-06-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/88284>

RIGHT:

一次元系における相転移と秩序

東大理 高 橋 実

§ 1. 相転移の問題

有限温度では一次元系は相転移を示さないということが数種¹⁾の問題について厳密な証明がなされていることはよく知られている。Landau Lifshitz²⁾はその教科書の中で以前からこのことを指摘している。彼らの考え方は、厳密であるとはいえないけれども非常に直感的で種々の場合に当てはまるのでまずそれを紹介しようと思う。

一次元系において二つの相が存在したとして、その表面エネルギーを ϵ とする。この場合は表面は点をなしているので面というのは必ずしも適切ではないかも知れない。そのような境界が n 個あった場合の状態の数は原子の総数を N とすると

$$\frac{N!}{n!(N-n)!}$$

と書ける。したがって自由エネルギー F は $n \ll N$ ならば

$$F \simeq n\epsilon + nkT \ln \frac{n}{N}$$

と書くことが出来る。 F が最小になるのは

$$n = N e^{-\frac{\epsilon}{kT}}$$

の場合であるが、この表式では境界が N のオーダーで存在することになり結局全体系は一つの相にすぎないことがわかる。しかし ϵ が無限であるか又は T が零であれば n が有限になる可能性がある。そこで長距離相互作用をもつイジング模型を考えて見よう。ハミルトニアンは

$$\mathcal{H} = - \sum_{n < m} J(n-m) (\sigma_n^z \sigma_m^z - 1).$$

$\uparrow\uparrow\uparrow\uparrow\downarrow\downarrow\downarrow\downarrow$ のような境界がある場合の表面エネルギーは

$$\epsilon = \sum_{n=1}^{\infty} n J(n)$$

と書ける。又一个スピンの反転するのに要するエネルギーは

$$\epsilon' = 2 \sum_{n=1}^{\infty} J(n)$$

である。 ϵ' が無限大であるとすれば有限温度でも状態は常に基底となるので相転移が起きるためには ϵ' は有限でなければならない。Kac-Thompson³⁾ は(1)が発散し(2)が有限であれば有限温度で相転移が起きるであろうと考えた。彼らの推測に従うならば $J(n) = 1/n^S$ のとき $1 < S \leq 2$ であれば起きることになる。Dyson⁴⁾ は $1 < S < 2$ の場合については正しいことを厳密に証明したが $S = 2$ の場合については $s-d$ の問題⁵⁾ との関連もあり非常に興味ある問題であるが厳密な証明はまだなされていない。

§ 2. 絶対零度における一次元系の長距離秩序の問題

§ 2.1. 反強磁性ハイゼンベルグ模型及びハッバード模型

最近接原子間にのみ相互作用の働く非等方的ハイゼンベルグ模型を考えよう。

$$\mathcal{H} = \sum_i r (\sigma_i^x \sigma_{i+1}^x + \sigma_i^y \sigma_{i+1}^y) + \sigma_i^z \sigma_{i+1}^z$$

とする。 $r=0$ の極限ではIsing模型であり $r=1$ では等方的ハイゼンベルグ模型となる。 $r=0$ ではground stateは明らかに長距離秩序を持つが r がfiniteの場合についてはどうであろうか。Bonner-Fisher⁶⁾ は、有限個の系について数値実験を行い $a = \lim_{n \rightarrow \infty} (-1)^n \langle \sigma_i^z \sigma_{i+n}^z \rangle$ のふるまい

を考察した。その結果 a は $r=0$ では1であり r がふえるにつれて連続的に減り $r=1$ では零になるらしいことがわかった。一次元ハッバード模型において電子数が原子数と等しい場合状況は等方的ハイゼンベルグに似て来ることが示されている。⁷⁾ 実際Harris-Lange⁸⁾ は相互作用が十分大きい極限では、

有効ハミルトニアンは等方的ハイゼンベルグ模型になることを示している。したがって Bonner-Fisher の計算を信用するかぎり，相互作用が十分強い場合のハubbard模型は反強磁性的長距離秩序を示さないと考えられる。また相互作用が弱くなっても反強磁性的な相関が強くなるとは考えられないのでやはり長距離秩序はないと考えられる。

§ 2.2. 一次元ボーズ ガスについて

相互作用がデルタ関数型のボーズ粒子系を考えよう。

$$\mathcal{H} = - \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2}{\partial x_i^2} + 2C \sum_{i < j} \delta(x_i - x_j)$$

C が無限大であれば基底状態の波動関数は周期的境界条件を仮定すれば

$$\psi(x_1, x_2, \dots, x_N) = C \left| \det e^{ik_j x_l} \right|$$

$$k_j = \frac{N-1}{2} \cdot \frac{2\pi}{L}, \frac{N-3}{2} \cdot \frac{2\pi}{L}, \dots, -\frac{N-1}{2} \cdot \frac{2\pi}{L}$$

と書けることは明らかである。一体の density matrix $\rho(x)$ は

$$\rho(x) \equiv \int \psi^*(x_1 + x, x_2, \dots, x_N) \psi(x_1, x_2, \dots, x_N) dx_1 dx_2 dx_3 \dots dx_N$$

によって定義される。 $\rho(x)$ の Fourier 変換 $\tilde{\rho}(k)$ が粒子系の運動量分布を表わすわけであるがもし $C = \infty$ においても Bose 凝縮が起っているとすれば $\tilde{\rho}(k)$ は $k=0$ においてデルタ関数型の peak があるはずである。波動関数が与えられているので $\rho(x)$ を求めることは簡単のように思えるがこの積分は思ったよりむずかしく $N \rightarrow \infty$ の場合の解析的な形も得られてはいない。しかしながら Girardeau⁹⁾ Lenard¹⁰⁾ 等の計算によれば $\tilde{\rho}$ は $k=0$ においてデルタ関数型の peak を持たず $1/\sqrt{|k|}$ の型の peak を持つことを示した。したがって $C = \infty$ においては，1 体の density matrix には off-diagonal long range order¹¹⁾ (ODLRO) がないことがわかる。 C が有限の場合も Lieb-Liniger¹²⁾ によって波動関数が与えられているにもかかわらず

density matrix の計算や ODLRO に関する議論はなされていない。

参 考 文 献

- 1) P. C. Hohenberg, Phys. Rev. 158 (1967), 383.
W. D. Mermin and H. Wagner, Phys. Rev. Letters 17.
(1966), 1133.
- 2) ランダウーリフシツ, "統計物理学", 岩波書店 (1958) 下249
- 3) M. Kac and C. J. Thompson, "Critical behavior of several
lattice models with long range interaction" Preprint
Rockefeller university, 1968.
- 4) F. J. Dyson, Commun. Math. Phys. 12 (1969), 91.
- 5) P. W. Anderson & G. Yuval, Phys. Rev. Letters 23.
(1969), 89.
- 6) J. C. Bonner and M. E. Fisher, Phys. Rev. 135 (1964),
A 640.
- 7) E. H. Lieb and F. Y. Wu, Phys. Rev. Letters 20 (1968),
1445.
- 8) A. B. Harris and R. V. Lange, Phys. Rev. 157 (1967),
295.
- 9) M. Girardeau, J. Math. Phys. 1 (1960), 516.
- 10) A. Lenard, J. Math. Phys. 5 (1964), 930.
- 11) C. N. Yang, Rev. Mod. Phys. 34 (1962), 694.
- 12) E. H. Lieb and W. Liniger, Phys. Rev. 130 (1963),
1605.